



コルネリオ会

(防衛関係キリスト者の会)

ニュースレターNo. 137

2014年12月



自衛隊生活を振り返って（その2）

1995年7月に米国陸軍最先任上級課程を陸上自衛隊の第一期生として無事に卒業できたことは本当にうれしいことでした。米国留学月例報告書については当時の渡辺陸幕長も大変関心があったと帰国報告時に教えられました。特に米国陸軍のチャプレン（軍牧師）制度について学び自衛隊でもこの制度が適応できる分野はないものか模索していました。帰国後の配置先は、陸上幕僚監部教育訓練部訓練課演習班（別名：演習部屋）となり毎日米軍専用電話で英語での連絡調整と5个方面隊との日米共同訓練の調整に追われていました。この4年間は大変忙しかったが充実した勤務でした。軍人キリスト者東アジア大会も東京の池袋で行われました。私は夜間、茗荷谷にある東京バプテスト神学校に入学して聖書を2年間学ばせて頂きました。クラスメイトには、既に牧師をされている方もおられます。感謝、感謝です。

その後、航空学校霞ヶ浦校勤務をしているときに陸幕演習班長であった君塚氏（当時沖縄混成団長、のちに陸幕長）より沖縄で通訳ができる自衛官が必要だと言う事で白羽の矢が当たり、念願の沖縄勤務となりました。赴任して1週間も経たないうちに米軍ヘリが沖縄国際大学に落ちた事案が発生し、君塚団長から直ちに特命で米軍司令部に赴き連絡調整を連日連夜続けました。沖縄勤務5年間は、私が自衛隊勤務経験を活かし、最も充実した米軍渉外業務の分野を発揮できるどころでした。私は、方面総監と第3海兵遠征軍司令官との直接会議通訳、米国陸軍、海軍、空軍、海兵隊各司令官と混成団長との表敬通訳、各種国際会議通訳、議事録作成等で追われ

コルネリオ会 副会長 中野 久永
ていました。特に毎週行われている定例在沖米軍司令官等会議に自衛隊渉外幹部として初めて参加させて頂き、以後米側の最新情報の入手と自衛隊側の考えを伝達することができるようになった事は、自衛隊としても大変意義のあることと確信しています。私はこの会議でも海兵隊チャプレンの発言に特に耳を傾け興味深く聴いていました。そのおかげかチャプレンと、親しくなり、在沖海兵隊の刑務所で私の証を囚人の前でする機会が与えられました。おそらく現職自衛官がこの施設に特別許可を得て入ったのは、初めてでしょう。改めてチャプレンの素晴らしさを実感いたしました。

また別の観点から私は、米軍の軍事法廷を継続的に傍聴席で傍聴してきました。軍法裁判について調べてみたかったからです。毎回傍聴席に私がいるので裁判官とも親しくなり、米陸軍のクリスチャンの裁判官との交わりが与えられました。1人の人間を裁くことについていかにあるべきか、ということはキリスト者であり裁判官という立場にある軍人は、神との祈りの時間を持つことであると思いました。



証をする筆者

沖縄5年間勤務の中でのべ約7か月間も米国出張

いたしました。テキサスを拠点としてアーカンソー州、カルフォルニア州、ワシントン州、アトランタ州、ニューメキシコ州、ミネソタ州、オハイオ州にも行くことができ、それぞれの地域では軍人クリスチャンとの親しい交わりを持つことができました。

軍人クリスチャンは、素晴らしく、お互い尊敬し合っています。なぜなら最も過酷な任務に就いているからです。このような人には、救い主であるイエス・キリストとの出会いが必要です。私は、自衛隊を定年して1年半になりました。振り返ってみますと神様の臨在があらゆるターニングポイントにおいて働いておられることを確信します。もちろんここに書けなかったさまざまな困難なことがあった時も神様が見守っていて下さったのだと信じています。目

アルゼンチン宣教（その4

在原宣教師が、アルゼンチンでの宣教に入ってから
の出来事について紹介します。

「悪いことは申しません。お止めなさい」。悲鳴に近いような声で「奥地ミシオネス州」への宣教に反対する一日系人夫人の声を耳に響かせながら、私たち家族を乗せた大陸列車（古い型のジーゼル車）は、1000 Km 北方に位置するミシオネス州とパラグアイ国境地帯にある州都ポサダスに向けて出発しました。1988年の秋も深まる4月中旬のことでした。

すでに話が進んでいたとはいえ、奥地ミシオネス州宣教における開戦について、当初は、人間的な思いではあまり重荷も信仰の情熱も感じない私たちでした。知人から耳にする現地の話は、すでに数十年前に現地で農業開拓をし、その後、逃げるようにして都市部にやってきた人々によるものです。迫力と説得力は十分すぎるほどありました。その内容たるや「危険地帯」（誘拐事件の続発は国際ニュースで日本にも知られていました）「厳しい自然環境」「遅れた社会」（医療設備、教育機関など）「日系人移住地の空洞化」等々、それはネガティブな話ばかりでした。「だからアリハラ先生、奥地へ行っても宣教の成功は望めません」というわけです。反対の忠告をしてくれる日系人の話には、実際に力がこもっていました。反して、宣教準備のために2か月間滞在していた首都ブエノスアイレスは、経済恐慌の洗礼をもろに受けていた

に見えることでなく、目に見えない信仰を喜び、更に神様にささげていこうと毎日を精進しつつ歩んでいこうと願っています。現在は、ギデオン協会ギデオンマンとしても聖書を各学校の前で贈呈する喜びが与えられ、牛久入国管理事務所に収容されている方たちに聖書をプレゼントする機会も与えられています。また、社会教育委員としても教育行政に少しでも私の経験を踏まえて貢献できることが幸せです。来年でもう10年になるのですが自殺を考えている方たちに直接関わっていることもしているのですが、こんなたった一人の人間でもつくづく自分は神様から生かされて活かされているので神様をほめたたえざるをえません！

感謝！感謝！感謝 救霊第一 栄光在主

ブエノスアイレスでの出来事

コルネリオ会 会員 圓林栄喜

とはいえ、南米のパリとしての威容を誇るだけの風格は備えていました。

中心地から一步郊外に出れば、そこには広大なスラム地区が形成されていたとはいえ、市内は、東京は山手線の内側を連想するほどに近代化で整っていました。交通機関、金融、商業地区、教育機関など、バブル経済の当時の日本と比較しても、勝るとも劣らぬと思えるほどの金満ぶりも目に付く格差社会でもあったのです。

「首都で宣教したほうが良いではないか？」半月も過ぎたころ、私の心にそんな思いがやってきました。ここは日本と変わらず機能的かつ便利な町で、特に、それまで最大の懸案となっていた3人の子供の教育のためにも、この町こそ最適な環境だと思えたからでした。明治から昭和の時代に日本にやってきた宣教師の多くは、子供の教育を優先したことから、主に「東京、横浜、神戸」などの国際的な都市に住居し、そこを宣教拠点として構えては地方宣教を推進したことも思いながら、首都に於ける宣教への思いは日ごとに強まっていきました。二か月という短期滞在期間ながら、追い打ちをかけるように、首都の日系人クリスチャンたちから、私たちに対する牧師就任要請の声も高まり始めていました。何としてもアリハラを牧師に招聘し、新しい教会を設立しようという複数集団の願いも、耳元に届くようになってきていました。当時、市内にあった2つの日系人教会は、一世と二世合わせて

100名前後と、それなりに教勢は安定しているかのようでした。が、しかし、2教会とも共通の霊的な問題を抱えていたのです。「リバイバル問題」がそれでした。

第二次リバイバルを迎えたアルゼンチンは、「不思議、奇跡、癒し」の顕著な御わざを現しながら、福音派の教会と信徒の数は爆発的成長を経験しており、当時その働きは絶頂下におかれた状態でした。いたる所で目にできる若き伝道者や信徒による、捨身とも言える大胆な街頭説教と、そこで見られる聖霊の御業は顕著でした。キリスト教嫌いの人であっても、光り輝く信徒の姿を目にしたら、即その場で教会に引き寄せられ回心していったという、本当に、嘘のような本当の証をたくさん見聞することができました。その光景は初代教会のペテロやヨハネの姿を連想するかのようでした（使徒行伝3, 4章）。しかし、「福音派の教会」イコール圧倒的多数が「ペンテコステ派」というリバイバルの国にあって、なにゆえか二つの日系人教会は「リバイバル」と「聖霊の働き」に反対の姿勢を持ち、「ペンテコステ派」に対しては異端の烙印すら押しつけている状態でした。このような状況下、「霊的な飢え渴き」を覚える日系人信徒たちの、現地人教会（アルゼンチン人教会）への流出も始まりを見せていたのです。「流転」とも「混乱」とも思えるそんな流れの中で、日本から「聖霊派」の流れを持つ「アリハラ」という宣教師がやって来たわけです。流出派の信徒たちが「アリハラ」を牧師として招請し、新しい「聖霊派」の教会を形成しようという動きは必然的に起こることになります。さまざまな出来事を体感しながら、主の御心は「奥地」か？それとも「首都」か？心が激しく揺さぶられていたそんなある日のことでした。主からの「啓示」と思える出来事がやってきたのです。

夏の終わりを告げる涼しい風を頬に感じていたその日私は、或るアルゼンチン人教会の牧師宅にお邪魔する人となり、しばらくの交わりの中で、自分の「証」と今後の「ビジョン」などを語ることになりました。スペイン語は初歩程度の語学力でしたから、相手にどの程度伝わったか分かりませんが、主に、ブエノスアイレスでの宣教に重荷を感じていることや、二つの日系人教会の問題点などを話していきました。30分程度の私の「証」に耳を傾けていたその牧師は、聞き終えるなり「スッ」と立ち上がり、自分の書斎へ向かっていきました。「トイレにでも行

ったのか？」と思っただけで、待つこと数分後に戻ってきた牧師は、穏やかで冷静な顔をしながら聖書を開き、そこを私に示し「主があなたに語っています」と言いながら黙想してしまいました。

「あなたは若かった時には、自分で帯を締めて、自分の歩きたいところを歩きました。しかし年をとると、あなたは自分の手を伸ばし、ほかの人があなたに帯をさせてあなたの「行きたくない所」に連れていきます。」（ヨハネ21章18節）

この「みことば」を目にした瞬間に色を失った私は、ほんの数分間という「霊的静寂」と思える「主の臨在」の中に一人置かれることになりました。そして、霊的悟りと決断は瞬時にやってきたのでした。「主の御心」は私たちが望んでいた都市部でなく、その日まで、「行きたくない」と思っていたパラグアイとの国境地にある奥地「ミシオネス州」にあることを、でした。ほぼ同時に、日本出発前に示されていた「決意のみことば」と「宣教師の宣教理念」も、鮮やかに心によみがえっては、奥地宣教参戦を確信することになりました。示されていたその「決意のみことば」とは・・・「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしの「くびき」を負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに「安らぎ」が来ます。」（マタイ11章29節）

「わたしに仕えるというのなら、その人はわたしについて来なさい。わたしがいる所に、わたしに仕える者もいるべきです。もしわたしに仕えるなら、父はその人に報いてくださいます。」（ヨハネ12章26節）

「みことば」の言わんとすることは、主の「十字架とくびき」を負うことで「平安」を得ることができ、この「平安」こそ「勝利のカギ」になるということでした。

さらに「宣教師の宣教理念」とは・・・「宣教師たるものは、現地の民が入っていけない所を開拓者として入りそこを整地して後に、現地の教会に譲渡して身を引くこと。」「宣教師たるものは、現地の民ができないことを率先して行い、そこを整地して後に、現地の教会に譲渡して身を引くこと。」

整然と啓示された上からの声により、私の決意はかたまり、迷いは瞬時に吹っ切れたのでした。主が、私たちを招いて待つてくださっている地は、奥地「ミシオネス

州」であることです。その日まで「リバイバル」と「聖霊のめぐみ」に飢え乾いていた日系人たちは、私たちの奥地宣教決断を聞き肩を落とされ、ある方々は目の前で涙を流されました。その後、人間的な「情」を断ち切る思いで、私たちは奥地の列車に乗り込むことになったのです。(次回に続く)

教え子からのメール

コルネリオ会 会員 中村誠一

沖縄の気候は、「涼しさ」を通り越して「寒さ」を感じるようになりました。30年前の沖縄勤務の時にも同じ思いをしました。転勤した年は暑くて大変でしたが2年目からは寒く感じるようになり、久米島で「こたつ」を出した記憶があります。体が気候に順応したのでしょう。

昨年の沖縄移住の直後、定年後に勤務した新宿の日本語学校時代の教え子で、中国の大連に住む中国人女性からメールが届きました。聡明でおとなしい方で、日本語の理解には不自由なく、所沢の家にも遊びに来てくれ、妻と料理の話で盛り上がっていました。お土産に自作の「ホイコーロー」を持ってきてくれたこともありました。私自身の病気に対する「お見舞い」とともに、彼女自身の「甲状腺がん」の発病を知らせる内容のもので、同時に私たち夫婦がクリスチャンであることを思い出し、キリスト教について詳しく知りたいので教えてほしいとのことでした。私は中国におけるキリスト教の布教状況に関する知識があまりありませんでしたので、中国語訳の聖書があるかとか、近くに教会があるか(教会があるとは思っていませんでした)、毎日祈ることが大切なこと、日本の教会で配信している日曜日のインターネット礼拝を見た方がいいよと、アドレスを一緒に返信するとともに妻と毎日祈っていること、そして御言葉の聖書箇所を示して返信しました。すぐに返事があり、手元に聖書があり御言葉を確認したこと、インターネットの配信は中国でも実施されていること、今年中に自身の2回の手術が予定されていることなどが書かれていました。

私は中国語の聖書について調べたり、彼女は日本語が堪能なので日本語聖書や、ついでに英語訳の聖書も送ろうと考えていたのですが、聖書は当面必要がないこと、私たち夫婦に自分の病気の回復のためのお祈りのお願いと、大連にある教会の内部写真を10枚ほど送ってくれ

ました。

中国での布教は厳しく、難しいものとばかり思っていたのですが、韓国人の友人の知り合いが中国宣教に行っていることや、日本からもかなりの人たちが中国に行っていることを友人から教えてもらいました。人口14億人の中国です。神様が宣教を喜ばないはずがありません。将来、彼女が聖霊に満たされ、中国伝道の一員として神に用いられれば、すごいことだなあと思いました。そうこうしているうちにTV報道で中国当局が建築法違反という理由で、完成が近い教会を取り壊している映像が流れました。このような中でも実は、文化大革命時代からキリスト教の信仰は中国全土で脈々と受け継がれていることや、沖縄の教会員のある方から「天国の人」という「中国キリスト教・家の教会の本」を紹介され、一気に読むことができました。真摯に神を求める人々の切実な、そして厳しい環境での信仰生活の様子が細やかに書かれてありました。私には実情を知らなかったことが恥ずかしくさえ思われました。

3年前のイスラエル宣教旅行に行く前に読んだ「TUNAMI」というアメリカ人牧師の書いたキリスト教の伝搬に関する本には、中東地区で誕生したキリスト教は地球を西へ西へと「西周り」で伝わり、エルサレムからギリシャ、ローマ、アフリカ、ヨーロッパ、大西洋を経て南北アメリカへ、そして太平洋を経てハワイ、東南アジア、日本、韓国、中央アジア、そしてエルサレムまで戻り、地球を一周するのだと解説していました。その途中に人口14億人の広大な中国が入っていないわけがありません。これからも中国におけるキリスト教の布教に関心を持つべきだと思っています。

私たち夫婦は彼女の手術の成功を祈り、彼女がキリストを信じていることができるようにとメールを送ったり、今もお祈りを続けています。彼女は今年すでに2回の手術を無事に乗り越え、健康が守られていることを主に感謝しています。

コルネリオ会 (防衛関係キリスト者の会)
メール：jmcfuse@gmail.com
郵便振込口座：00130-3-87577(コルネリオ会)